

# タンジールと民衆

—「山上でのティー」と『雨は降るがままにせよ』—

外山健二

## 1 はじめに

「山上でのティー」(“Tea on the Mountain,” 1945) と『雨は降るがままにせよ』(Let it Come Down, 1952) の舞台設定は、タンジールとなっている。では、これらの作品の作者であるポール・ボウルズ (Paul Bowles, 1910-1999) にとって、このモロッコの港街タンジールとは、いかなる街なのであろうか。そして、ボウルズは、このタンジールをどのように描写したのであろうか。

「山上でのティー」は、アメリカ作家がタンジールの若者とカフェで出会うところからはじまる。出会ったその作家とタンジールの若者は、ピクニックへ行く約束をする。しかし、なぜ、二人はカフェで会うのか。さらに、タンジールにおいて、なぜピクニックなのか。他方、『雨は降るがままにせよ』において、アメリカ人ダイヤーは、アメリカでの退屈な生活に飽きタンジールへ向かう。ダイヤーは、アメリカで経験することができなかった充実感や生きる喜びをタンジールに期待する。

「山上でのティー」と同様、ダイヤーはピクニックに行く。では、このピクニックは、「山上でのティー」のピクニックとどう関係しているのであろうか。

こうした問題を追究するために、まず、ボウルズの設定する主人公が出会うタンジールの住民を「民衆」<sup>1)</sup> という概念で考える。イスラーム圏タンジールでは、特に、「ムスリム民衆」を想定した「民衆」であるが、民衆史を考えると、「民衆」に対峙されるのは、「民族」である。民族学では、民衆は「〈民族〉という総体に共有された〈民族性〉を体現する無名の人々」であり、主体としての「民衆」ではない。歴史学からの理解では、地方史などととも、「民衆」を対象とすることで民衆史が登場し、「民衆」が主役として活躍する。さらに、大文字単数形の「イスラーム (Islam)」が示唆する普遍性を意識するだけではなく、小文字単数形の「イスラーム (islams)」が示唆するイスラームの多様性を意識し、このような枠組みから、本稿では、民族学的意味合いではなく、主役となる「民衆」を踏まえ、このイスラーム圏タンジールをボウルズはいかに描写したのか、という問いに答えることが目的

となる。

## 2 「山上でのティー」におけるタンジール

1931年にガードルード・スタインに勧められ、フランスからアロン・コープランドとともにタンジールへボウルズは初めて渡った。1930年代のタンジールが自伝『止まることなく』(*Without Stopping*, 1972)に描写されているように、ボウルズはアメリカからの逃避先としてタンジールを1930年代夢見た。タンジールはボウルズにとって、「夢の街」であった。

自動車が走っていなかったのも、フランス広場のカフェで落ち着いて坐り、木々ととまった蝉の声を聞けたように、モロッコにラジオが届いていなかったという事実は、〈旧市街〉の中心にあるカフェでも、何百という人々の声だけしか聞こえないことを意味した<sup>2)</sup>。(Bowles 1972, 129)

ラジオの音がしないこの街の表象は、アメリカとは正反対な非文明化された街であり、タンジールという夢の街がボウルズに対峙する。ボウルズはフランスでシュールレアリスムに関心を持ち、シュールリアリストが崇拝するロートレアモンを好んだように、ロマン主義的な夢をタンジールに抱いた。

さらにボウルズは、タンジールを次のように描写する。

街は自給自足の清潔な街で、国際的管理と有能な警察権力によって、社会経済的な生活はるか昔のまま強制的に凍結されたおもちゃの都市だった。犯罪は皆無だった。ヨーロッパ人の存在は社会の財産だったので、ヨーロッパ人を尊敬しない人はいなかった。(Bowles 1972, 129)

もちろんこの表象は30年後に皮肉をもって形成されたものであろう。すなわち、ボウルズがタンジールに期待した「夢の街」は、二律背反的に構造化されていた。「自給自足の清潔な街」、「昔のまま……凍結されたおもちゃの都市」、「犯罪は皆無」。そして、「ヨーロッパ人」が尊敬の対象となる。こうした街は、1930年代にボウルズが抱いた夢の街であった。だが、そこが、「国際的管理と有能な警察権力」によって「強制」されていて、「ヨーロッパ人」が尊敬されるのも、「社会の財産」だからである。そのような社会とは、まさに植民地に他ならない。1970年頃にはすでにボウルズはこの二律背反構造を認識していた。つまり、国際的管理と警察権力と

はフランスとスペインのそれであり、フランスとスペインによってタンジールは清潔を保ち、経済の安定化があった。

1930年代のボウルズは移動者としてタンジールを眺める。というのも、ボウルズは1930年代においてはタンジールの住民ではないからだ。1931年に初めてタンジールを訪問し、1932年に再び行き、1934年を最後に、1930年代にはタンジール訪問は3回と意外に少ない。1947年以降、ボウルズはタンジールを拠点とする。このようなことから、ボウルズの1930年代のタンジール像は、アメリカからタンジールへの移動者ボウルズのオリエンタリズムの視点に留まっていたと思える。

なぜなら、ボウルズの抱く夢は幼少時のアメリカにおける夢とも連動するからだ。ボウルズは幼少期に遊びとして、地名のリストを作った。架空の地名を作り、駅名を作り、地図を製作した。架空の地名から地図という現実化作用は、タンジールという都市への眼差しともなる。ボウルズが小川のほとりに命名した「ノットニンリヴォ」(Notninrivo)に対して、ボウルズの父親が「川には何も無い」(Nothing in the river)と言及し、無意味なでっちあげをする大人への敵意がボウルズから現出する場面であり、幼き彼を雪のなかに投げ捨てたアメリカに住む父親からの逃避という側面が、地名に係る。つまり、移動者ボウルズのアメリカを介したタンジールへの視点である。

では、その「夢の街」タンジールが1930年代に書かれた「山上でのティー」では、いかに描写されるのか。「山上でのティー」に描写されるのは、カフェである。フランス植民地政府を想起させるカフェであり、そのフランス管理下でもある「夢の街」のタンジールである。タンジールでフランス語を学ぶ若者は、アメリカ人作家とカフェで待ち合わせをする。この若者ムジドと親友のガジはアメリカ人作家とピクニックに出かけるが、そのピクニックは、ヨーロッパ的な出来事となる。ピクニックの行き先地であるリフ山脈に住むベルベル人の農夫には現地で生産されたパンやオレンジを勧められるが、若者らは拒否する。彼らはヨーロッパ産のハムを食べ、ワインを飲む。ヨーロッパ化がモロッコにおけるピクニックによって実現される。

なぜ、タンジールにおいてピクニックなのか。なぜピクニックが描写されるのか。カフェから移動し、彼らは、リフ山脈に住むベルベル人農夫に出会う。そうした設定がなされている。つまり、カフェと農業が連動しているのだ。カフェというフランス語からフランス宗主国が連想され、ベルベル人からは農夫と農業を示す記号となる。1930年代は大不況の時代である。1929年に始まる世界大恐慌はモロッコにも経済的打撃を与えていた。モロッコの最大貿易相手国であるフランスには世界大恐慌の余波があった。そのため、1929年から1935年の間で、モロッコの輸出は49%

まで、輸入は57%まで下落した (Pennell, 219)。ボウルズが初めて訪問したモロッコの1930年代前半は、経済不況のまっただ中であったことになる。「自給自足」の街とは、農業に立脚した経済のモロッコという記号でもある。フランスを連想させるカフェは、宗主国フランスだけではなく、貿易国フランスという側面をあわせもつ。

注目したいのは、ベルベル人農夫がアメリカ人作家らに手渡すオレンジである。オレンジは自給自足の経済を示すだけであろうか。1920年代後半には、柑橘系の果物が、主要輸出品となった (Pennell, 224)。モロッコの気候はアメリカのカリフォルニアの気候と似通っており、モロッコは地中海のカリフォルニアとして再生したのである。1980年代頃までには、世界第二のオレンジ輸出国となった。従って、アメリカ人作家に提供するベルベル人農夫のオレンジは、モロッコ成長の証左となる。

アメリカ人作家は、カフェから移動し、リフ山脈のピクニックでオレンジを渡された。ピクニック先の農地から栽培されるオレンジは、モロッコ経済の基盤となり、フランス保護国のモロッコが成立する要因となる。実は、コロン (入植者) の農業者が植民地栽培として柑橘類を推進したのであった。1930年代におけるピクニック先のベルベル人の農地管理は、フランスの第二帝政の政策である「フランス人は都市に住み、原住民の農民を支配する」という政策を反映し、アメリカ人作家がムジトと出会った都市に存在するカフェが連動される。カフェはコロンがモロッコに持ち込んだ習慣でもあり、カフェとホテルが一体化したもの (図1) までである。これは、コロンがベルベル人とは「別居」した形態での農業を経営し、現地人が住む



図1 モロッコのコロン生活を示すカフェとホテルの複合施設  
(出典：C.R.Pennell, *Morocco Since 1830*)

〈旧市街〉に対して、ヨーロッパ人地区である〈新市街〉形成の契機を示すものでもある。このカフェやホテルのフランスによる複合施設は、フランスによる第一次世界大戦後における不況を同時に示す。戦後の不況のため、フランスは植民地への公共投資による景気回復を図った。後述するモロッコのインフラストラクチャーである電気などに公共資金が投資され、カフェ建設にも反映された。

### 3 『雨は降るがままにせよ』における民衆

民衆の介入は、1930年代の「山上でのティー」のピクニックの場面と『雨は降るがままにせよ』とのピクニックの場面とに差異を生む。『雨は降るがままにせよ』において、ダイヤーは「魔王」というバーで売春婦のハディーシャと出会う。その出会いがきっかけで、彼らはピクニックに出かける。「山上でのティー」では、アメリカ人作家らがオレンジなどをベルベル人農夫から提供されるが、『雨は降るがままにせよ』のピクニックは、イギリス領事の娘であるユーニス・グッドとダイヤーの関係が絡む。ユーニス・グッドはバー「魔王」の財産を賄賂に使うと目論み、ハディーシャを利用しようとするが、ダイヤーと彼女とのピクニックのために、ハディーシャとの出会いが妨げられる。

『雨は降るがままにせよ』のピクニックはハディーシャに左右されることになる。ハディーシャはキプロス出身であり、ギリシャ語と英語を使用する。キプロス出身の彼女の英語とギリシャ語使用という側面から、キプロスの複合国家像が垣間見えるだろう<sup>3)</sup>。1878年にキプロスは大英帝国の租借地となった。それまでキプロスはトルコ帝国の支配下にあったため、トルコ系住民とギリシャ系住民の対立があった。1940年代のギリシャ・ナショナリズムの高揚とともに反英運動のなか、キプロスの独立、旧宗主国のトルコへの帰属、ギリシャ領化という問題が存在する。ハディーシャの話す英語とギリシャ語は、イギリスとキプロスの記号であり、特に、彼女の英語使用はタンジールにおけるイギリスの影を落とす。それを裏付けるように、ハディーシャが働くバー「魔王」の奥では、「祈祷書とロザリオ」の映像が流された。この「祈祷書とロザリオ」の映像は、民衆のためのキリスト教の「教会の祈り」を映し出し、英語を話すハディーシャは「魔王」というタンジールのバーで、キリスト教を回顧する機会を得ていたことになる。キプロスにおけるイギリスによる支配の影響を帯びながら、キリスト教徒のギリシャ化としてのハディーシャが、タンジールに移り住んだことになる。タンジールには、「スペイン、イギリス、モロッコの郵便システムを代表する三つの異なったポストが置かれ、互いに利用者を求めて張り合っていた」(Green, 13) のであり、「外国人の中でもっとも高い地位を占め

ていたのはイギリス人」(Green, 13)であったのがタンジールである。

ハディーシャはピクニックにダイヤーと同行し、その結果、ユニス・グッドとダイヤーの対立を生み出す。この対立は、ユニス・グッドがダイヤーにアメリカ領事館のジュヴァノン・ピエールを紹介する契機となり、ダイヤーはピエールに情報を提供され、情報提供の見返りとして、ダイヤーはピエールから小切手という形で収入を得る。そこで登場するのが、イギリス通貨調査官アッシュカム・ダンバースである。タンジールでは、イギリス硬貨が流通せず、小切手のイギリス硬貨への両替の通貨制限をダンバースは取り締まる。これは、ダンバースのタンジールにおけるイギリス性を示す要素である。ユニス・グッドによってピエールがダイヤーに紹介されることは、タンジールにおけるイギリスの通貨流通状況に連動し、ハディーシャのダイヤーとのピクニックが起点となり、結果的に、ハディーシャのイギリスという要素を暗に示唆する。ハディーシャの持つイギリス性の象徴は、英語を理解できるユニス・グッドがハディーシャを利用する記号ともなる。ユニス・グッドが英語を話すハディーシャを味方にすれば、タンジールでの民衆レベルでの生活を知る手掛かりとなり、有益になる。ハディーシャというタンジールの民衆を通して、ユニス・グッドはタンジールを理解し、そのユニス・グッドとダイヤーという対立構造を描写しているのが『雨は降るがままにせよ』である。

『雨は降るがままにせよ』では、ハディーシャというムスリム民衆の存在をこのように読みとれるが、1930年代の「山上のティー」のベルベル人農夫の民衆と1940年代の『雨は降るがままにせよ』におけるハディーシャという民衆には差異があることになる。ポウルズのタンジールにおける民衆把握において「山上でのティー」と『雨は降るがままにせよ』の差異を認識するのは、『雨は降るがままにせよ』におけるもう一人の民衆であるタミの機能である。エムサラ出身のタミは、「よからぬことを天から授かる」<sup>4)</sup> ことで「自虐的な喜び」をする。「自虐的な喜び」は、スーフイズム(イスラーム神秘主義)<sup>5)</sup> ではないか。「自虐的な喜び」とは、スーフィーがファナー(消滅)の段階に到達したことを示している。ファナーの最後の段階は、「自我からの完全な消滅」であり、同時に、「無上の歓喜」である。タミは、「内面には望ましい変化」(151)がないことに不満を持つ。これはスーフイズムの修行、すなわち、「自己の行為を形式的、倫理的に神の命令意志に一致させる」ことに加え、「内面的にも自己と神とを隔てるいっさいのものを取り除く」に合致する。タミのスーフィー性である。

さらに、公爵夫人デージー・ド・ヴァルヴァーディはイスラームについて次のように語る。

デイジーは次々と黒魔術、インドのトラヴェンコールで見たハタヨーガのこと、呪文や祈祷が日常生活の重要な部分を占めていることを認めないことにはイスラム教国の法的手続が理解できないなどと語った。(210)

このデイジーの言及は、スーフィズムの起源と関連している。ヨーガのインド的伝統の影響はスーフィズムの発生の要因の一つと考えられ、デイジーによってタンジールにおけるスーフィズムの存在が示唆される。

『雨は降るがままにせよ』においては、雨が至る所で降る。ダイヤーがタンジールに着いた当日にも雨が激しく降り出した。タンジールで旅行代理業を営むジャック・ウィルコックスと会うための電話のときも雨だ。デイジー主催の晩宴会時にも雨である。ボウルズが「30年後」という書き出しの部分で書いているように、『雨は降るがままにせよ』というタイトルは、『マクベス』からの引用であり、バンクナーが今夜雨は降るだろうという台詞に対しての第一の暗殺者の「大降りだぞ」(“Let it come down”)という台詞である。『雨は降るがままにせよ』というタイトルは1952年にボウルズによって命名されたが、それはタンジールの終焉の前兆となる暴動の最中だった。1952年3月30日以後タンジールは様変わりしたことになる。1952年、フランス植民地政府は、政党や労働組合を弾圧し、1953年には、スルタンムハンマドを廃位し、傀儡のスルタンを任命した。

「雨」はタンジールの終焉を示し、新たなタンジールの予兆なのであろうか。スーフィズムには民衆の聖者がいる。聖者の聖性はバラカである。このバラカによって奇跡が起こると言われる。『雨は降るがままにせよ』においては、聖者が祈雨(水の供給)の奇跡をあたかも起こしているようである。1943年はモロッコの旱魃の年であった。聖者の祈雨によって民衆の声に答え、1940年代モロッコの変容後のタンジールが『雨は降るがままにせよ』に描写される。雨がタンジール変容の記号となる。雨から聖者という連鎖は、タンジールにおけるムスリム民衆の動勢となる。

このようにタミを契機として、スーフィズム、さらに、スーフィズムの特性である民衆の聖者を読むことができ、「山上でのティー」における民衆描写が、ハディーシャの描写に加え、差異が生じていることが分かる。

#### 4 『雨は降るがままにせよ』の晩宴会

さらに『雨は降るがままにせよ』におけるボウルズのタンジール描写を理解するために、民衆の描写に加え、タンジールで開催される「晩宴会」の役割を述べる。「晩宴会」で必要なのは電気である。『雨は降るがままにせよ』におけるタンジール

ルは、一晩おきに二時間しか電気は使用できない。しかし、侯爵夫人デイジーの別荘は電気を使い放題である。この電気使用量の差異は何か。

電気は科学技術と連動している。『雨は降るがままにせよ』のタンジールは1940年代である。ポウルズは1934年以後、タンジールを訪れたのが1947年であるため、戦後のタンジールが『雨は降るがままにせよ』では描写されていることになる。1940年にドイツに敗れたフランスは、モロッコの失業問題を引き起こしていた。しかも、1943年のモロッコにおける旱魃によって、モロッコの農夫は約60%から70%の家畜を失った。科学技術は農夫にまでは届かなかつたのである。電気が一晩おきに二時間しか使えない。これがタンジールの状況で、停電は日常茶飯時であった（Green, 17）。

一方、デイジーの別荘は電気を使い放題である。フランスによる公共資金の投資による電気である。この電気によって、デイジー主催の「晩餐会」が可能となる。この「晩餐会」がタンジールの社交場となり、ダイヤーを主人公とする物語が始まる。タンジールで旅行代理業をするウィルコックスに出会うため、ダイヤーはアメリカからタンジールに到着した。ウィルコックスの父親は、ダイヤー家のホームドクターだったからである。ダイヤーは、タンジールに着いたその日に、デイジーから「晩餐会」に招待された。大量の電気がある「晩餐会」への誘いである。「晩餐会」後、ダイヤーが散歩をしているとタミと出会う。タミは肉体労働者が住むエムサラ出身である。つまり、ダイヤーは、雇用問題を抱える労働者タミと出会うのである。ダイヤーのタンジールに到着したその日の出来事によって、「晩餐会」における出会いが演出されたことになる。

では、「晩餐会」はいかに機能するのか。「晩餐会」は電気が大量に使用されることで成立した。電気の使用は、フランス政府からの援助が必要であり、その見返りとして、デイジーはタンジールの情報を植民地政府に提供していた。その情報源が、また、「晩餐会」であった。タンジールは植民地政府の保護区であることから、国家権力といった軍事力によって管理される。そこには、国家権力に反発する民衆の声が存在する。その民衆の声の吸収源が「晩餐会」であったとも言える。

1946年、「モロッコ労働組合同盟」という全国組織が成立し、そこにはモロッコ人労働者が多数参加した（宮治, 144）。労働組合や協同組合（associations）が形成されることになった。イスティクラール党（独立党）は、モロッコ労働組合同盟と協力し、宗主国の権威主義体制に牽制する動きを可能にした。つまり、「市民社会」<sup>61</sup>がモロッコに芽生えていると言える。バーナード・ルイスによれば、イスラーム圏の「市民社会」は、次のようなものであった。



「市民社会」という用語の最も広く受け入れられている解釈に従えば、市民とは、宗教的権力あるいは軍事的権力の反対語ではなく、権力そのものの反対語である。この意味では市民社会とは社会の一部をなし、家族と国家の間であり、そこでは結社、イニシアティブ、行動などのすべての原動力は自発性で、意見、利益、あるいは個人的選択によって決定されるのであって、生まれによって決まる忠誠心や力によって強制される服従からは自由—影響されることもあるだろうが—であることが前提となっている。明らかな近代の事例としては、事業法人、労働組合、職業組合、学会、クラブや結社、スポーツ・チーム、政党などがある。(ルイス 2003, 166)

このように「市民社会」の存在を考えれば、「晩餐会」は「市民社会」の一形態としてタンジールに位置づけられている。それは、植民地政府の独裁体制とタンジールの民衆の中間項としての「市民社会」である。デージーは「晩餐会」でしか交流できない人々と情報交換する。民衆の声は「晩餐会」を介して国家に届く。従って、国家権力が増大すれば、「市民社会」の機能は減少する。逆に、国家の介入が減少すれば、自発的な「市民社会」は活発化する。

具体的には、次の引用が手掛かりとなる。

アメリカ人の友だちとの会話から集められるかもしれないちょっとした情報、加えてシディ・カセムにある「ヴォイス・オヴ・アメリカ」の放送装置に関する一、二の特殊な事実、これは彼が理解する必要のないもので—こういうことを教えてくれれば見返りとして毎月五百ドル、そしていますぐ前金として一ヶ月分は払うことができると彼女は告げ、夫はかなり優秀な電気技術者で放送装置のことについてはわかるから心配しなくていい、とあわてて念を押した。

(149)

これは、情報と経済が関連していることを示している。情報源である「晩餐会」は、電気がなくては開催できなかった。電気代を支払うのは「晩餐会」の主催者である。電気は国家から与えられるので、それは経済生活への国家の介入である。タミは労働者が住むエムサラに住むが、密輸を行っていた。ダイヤーによる賄賂からも判断できるように、闇市市場経済の存在である。電気使用量制限という国家の介入によって、タンジールは暗闇である。不安定な生活の労働者は、違法取引を実践し、闇市市場経済を拡大する。近代化という国家権力の増大によって、民衆は経済生活が圧迫され、自足的な「市民社会」は成立しにくくなる。その意味でも、「晩

餐会」は民衆と国家の中間項として意義がある。タミのベダウイ兄弟が主催するパーティーは、次のように機能している。

ベダウイ兄弟が催す日曜日のパーティーがユニークなのは、様々なヨーロッパ植民地の住人がこれに出席しても面目を失わずにすむことだった。招待客がイスラム教徒であることが客の間にたぶん無意識に連帯感をもたらしていたからだろう。この連帯感をもたらした原因は招待主はいっこうに気にせず喜々としてヨーロッパの客を迎え入れたのである。フランス公使の妻が、最下層階級のアメリカ人観光客とこのパーティーで話を交わしても、それが常軌を逸したことは誰も思わない。(113)

## 5 おわりに

『雨は降るがままにせよ』は、現実に存在する個人の実存としての人間を問う実存主義的作品であるとされることがある。確かに、タンジールは、ミシェル・グリーンが指摘するように「実存主義者の抱くユートピアつまり、万人が一つの奇妙な夢を共有し、各々その一部をつかみとることができるような場所」(Green, 14)でもあり、ポウルズが永住を決意する1947年のタンジールは、ヨーロッパ系住民タンジェリノと現地人タンジャヴィが住む「国際管理地帯」である。ダイヤーはダイジーに次のように言う。

「人類を生み出す大量生産の中で一人ひとりが比較できることなんてあったためしがありません。毎年毎年、毎世紀同じモデルが生まれ、すべて似通っていて、いつも同じような人間ばかり」(35)

さらに、続けてダイヤーは「ぼくは生きているという実感を味わいたいです」(35)と言う。事実、ダイヤーの実存主義的生き方を否定はできない。ダイヤー(Dyar)の名は、“die-er”とも発音が同じ(Hamovitch, 440)であり、「生か死か」という命題を連想させ、アメリカからタンジールという第三世界において、ダイヤーは凄まじい(“dire”)生き方をする。ポウルズの分身としてダイヤーを語るとしても、実際にポウルズが影響を受けた分身小説と言われるポーの「ウィリアム・ウィルソン」を関連付け、自伝『止まることなく』を踏まえ、ポウルズの心理的影響を読みとることは可能だ(Hamovitch, 442)。ポウルズのタンジール永住の決意は、1947年になされた。『雨は降るがままにせよ』の1940年代と同時期である。ポウル

ズの「山上でのティー」における 1930 年代のタンジールへの眼差しには、植民地的眼差しが残存し、タンジールの民衆の視点が欠如している。モロッコのオレンジやカフェといった複合施設の発見の契機に民衆が存在するとしても、国家や「市民社会」への機能にまでボウルズは踏み込んでいない。一方、1940 年代のタンジールでは、例えば、民衆の自発的な「晩餐会」の「市民社会」が描写され、軍事体制の植民地支配を示す複合施設に留まらず、国家と民衆の中間を示す「市民社会」が浮き彫りになったと言えるだろう。タンジールの「晩餐会」やパーティーといった「市民社会」を、ボウルズは宗主国側というよりはむしろ民衆側から提示している。1943 年、モロッコでは、サルタン・ベン・ユーセフ（1927-1961）の指導體制の下、イステクラル党が結成され、1940 年代はモロッコの独立運動が展開された時期でもある。宗主国フランスは、ベン・ユーセフの独立要求を拒否し、彼をマダカスカルへ流刑した。このことが契機となり、モロッコ民衆が反仏抗争を展開し、民衆対フランスという構図が成立する。したがって、1940 年代、ボウルズは、フランスに対して蜂起するモロッコの主体的民衆を目の当たりにしたと想定できる。観光客が訪れるような宮殿や海岸といった場所ではなく、中流階級や下層階級の家々やムスリムの常連がいる現地のカフェに行つてこそ、モロッコの平均的な日常生活を知ることができる。特に、カフェでは、モロッコのナショナリストが観光客に対して愛想の良い無関心さで接する態度に変化が生じている、そうボウルズは指摘している、ということ最後に強調しておきたい（Bowles 1958, 158）。

## 注

- 1) 「民衆」については、赤堀雅幸「ムスリム民衆研究の可能性」佐藤次高編『イスラーム地域研究の可能性』（東京大学出版会、2003）を参照。
- 2) Bowles, *Without Stopping* の邦訳として、『止まることなく』山西治男訳（白水社、1995）を参照。
- 3) キプロスについては、大島直正『複合民族国家キプロスの悲劇』（新潮新書、1986）を参考にした。なお、ギリシャ・ナショナリズムについて、村田奈々子は、「分断された島キプロス」周藤芳幸・村田奈々子編著『ギリシアを知る事典』（東京堂出版、2000）のなかで次のように言及している。ギリシャ・ナショナリズムは、イギリス支配（1879-1959）に拠るところが大きく、「ロシア帝国からオスマン帝国が攻撃された場合に援助する代償として、イギリスはキプロスの施政権 1878 年に譲渡された。その後、イギリスは 1914 年にキプロスを併合し、1925 年に直轄植民地とした」。
- 4) Bowles, *Let It Come Down* (Santa Rosa: Black Sparrow Press, 1952; 1997), p.43. 以下この作品の引用は本文中に括弧で頁数を示した。邦訳として、『雨は降るがままにせよ』飯田隆昭訳（思潮社、1994）を参照。

- 5) スーフイズム（神秘主義）については、R.A. ニコルソン『イスラムの神秘主義—スーフイズム入門』中村廣治郎訳（平凡社、1996）を参照。グリーンは『地の果ての夢タンジール』のなかで、「ボウルズは1933年の冬中、絶え間なく旅を続けた。明け方に満員のバスに乗ったり、座りごちの悪いラクダの背にまたがって、異国情緒たっぷりの旅行も経験した。北アフリカは、彼がこれまで会ったことがないような奇妙な人間たちの住む土地であった。神秘主義の底流が、ベルベル人の遊牧民の間にも、彼らの同胞であるアラブ人の間にも流れており、雑踏で賑わう野外市場の真ん中で山羊に変身する男に出くわすこともあった」（6）と言及する。ここから判断すれば、1930年代に、ボウルズは〈異国情緒〉として神秘主義の存在を知ったことになる。なお、スーフイズムの研究者である東長靖『イスラームのとらえ方』（山川出版社、1996）の説明によれば、「スーフイズムという言葉は、アラビア語のスーフイーという言葉に、ヨーロッパ諸語のイズムという言葉をつつけた造語である。ではスーフイーとは何か。それは、外形より心の内面を重んじて、修行に励む人々ということができる。スーフイズムとはこのような人々の営為を広くさしている」。
- 6) 「市民社会」については、Eickelman, Dale F. 1996. “Foreword,” A. R. Norton, ed., *Civil Society in the Middle East*, Vol.2, Leiden: E. J. Brill を参照。アイケルマンは、「市民社会」について次のように述べる。“civil society where a mélange of associations, clubs, guilds, syndicates, federations, unions, parties and groups come together to provide a buffer between state and citizen,”p.7. なお、グリーンは『地の果ての夢タンジール』のなかで、タンジールの社交界について、「パーティーを儀式のように考えている外交官連中が、社交界に活気を与えていた」（83）と述べている。

### 参考文献

- Bowles, Paul. 1952; 1997. *Let It Come Down*. Santa Rosa: Black Sparrow Press（ポール・ボウルズ『雨は降るがままにせよ』飯田隆昭訳、思潮社、1994）。
- . 1945; 1996. “Tea on the Mountain,” *Collected Stories: 1939-1976*. Santa Rosa: Black Sparrow Press.
- . 1958.3. “The Worlds of Tangier,” *Holiday* 23.
- . 1972. *Without Stopping*. New York: G.P Putnam's Sons（『止まることなく』山西治男訳、白水社、1995）。
- Eickelman, Dale F. 1996. “Foreword,” A. R. Norton, ed., *Civil Society in the Middle East*, Vol.2. Leiden: E. J. Brill.
- Green, Michell. 1992. *The Dream at the End of the World: Paul Bowles and the Literary Renegades in Tangier*. New York: Harper Perennial（ミシェル・グリーン『地の果ての夢タンジール』新井潤美他訳、河出書房新社、1994）。
- Hamovitch, Mitzi Berger. 1986. “Release from Torment: The Fragment Double in Bowles's *Let It Come Down*,” *Twentieth Century Literature — A Scholarly And Critical Journal*, Vol.32, No.3/4 Fall/Winter, Hofstra University.
- Keddie, Nikki R, ed. 1978. *Scholars, Saints, and Sufis: Muslim Religious Institutions in the Middle East since 1500*. Berkeley: University of California Press.
- Lacey, R. Kevin and Poole Francis, ed. 1996. *Mirrors on the Maghrib: Critical Reflections on Paul Bowles*

- and Other American Writers in Morocco*. Delmar and New York: Caravan Books.
- Lewis, Bernard. 2001. *What Went Wrong?: Western Impact and Middle Eastern Response*. Oxford and New York: Oxford University Press (バーナード・ルイス『イスラム世界はなぜ没落したか?』臼杵陽監訳、今松泰・福田義昭訳、日本評論社、2003).
- Mullins, Greg A. 2002. *Colonial Affairs: Bowles, Burroughs, and Chester Write Tangier*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Nicholson, Reynold A. 1914. *The Mystics of Islam*. London: G. Bell and Sons (レナルド・A. ニコルソン『イスラムの神秘主義—スーフィズム入門』中村廣治郎訳、平凡社、1996).
- Pennell, C.R. 2000. *Morocco Since 1830*. United Kingdom: C.Hurst & Co.
- 赤堀雅幸 2003 「ムスリム民衆研究の可能性」佐藤次高編『イスラーム地域研究の可能性』東京大学出版会。
- 大島直政 1986『複合民族国家キプロスの悲劇』新潮社。
- 私市正年 1996『イスラム聖者』講談社。
- 東長靖 1996『イスラームのとらえ方』山川出版社。
- 宮治一雄 1978『アフリカ現代史V』(世界現代史17)山川出版社。
- 村田奈々子 2000「分断された島キプロス」周藤芳幸・村田奈々子編著『ギリシアを知る事典』東京堂出版。